

---

# 俺と妹と偽装デート大作戦

黒鉄大和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と妹と偽装デート大作戦

### 【Nコード】

N9193J

### 【作者名】

黒鉄大和

### 【あらすじ】

俺の妹、瀬川七海は俺が言うのもなんだが超がつく美少女だ。よく友達からは羨ましがれるが、それはアニメやらマンガの読み過ぎだ。現実の妹なんて、兄に対して尊敬も謙譲も何もない、下手したら対等としてすらも見ていない小悪魔みたいなもんだ。こんな妹と一緒になんて、不幸以外の何ものでもないね！  
だが、妹から届いた一通のメールから事態は思わぬ方向へ転がる事に！？

黒鉄大和が送る今までとは少し作風を変えた完全新作短編（ネット

小説的には長編？）、スタートです！

## 理想と現実の妹（前書き）

初めましてからこんばんわまで。どうも、黒鉄大和です。

今回はバレンタイン企画としてこの小説を書いてみました。しかし、結局間に合わずこんな中途半端な時期に投稿する事になってしまいました。

今回のお話は僕がいつも書く戦記でもバトルでもハーレムでもない全くの新ジャンルです。しかも、ちょっと作風を変えてみた実験作品でもあります。

しかし、完成度としては結構高いと僕自身自負しております。最後まで目を通してもらえれば幸いです。では、久しぶりの新作をどうぞ！

注意：この作品は一部の描写で文庫本の内容を参考に書いている部分があります。全体的に見れば参考にした本とは全く違う作品ですが、シナリオを考える際に一部内容が似てしまったので参考にしました。決して盗作やパクリのつもりはありませんが、指摘された場合は極力修正し、最悪の場合は削除も致します。しかし、できれば温かい目で見てください。

## 理想と現実の妹

「妹って最高だよなあ」

時計の針が午後に入ってから一回りする寸前くらいにやって来る成長期である青少年達の腹時計を無視した昼休み。いつもの面々で昼飯を食っていた俺に掛けられた言葉がそれだった。

「優しい声で「お兄ちゃん」なんて言われたら、もう震えが止まらないぜ」

そう言って箸を片手にすでに震えている黒縁メガネの少年。こいつの名前は平沢明人<sup>ひらさわ あきと</sup>。これまでの言動から簡単に推測できると思うが、いわゆるオタクという奴である。何しろ自分の誇りを某超有名ツンデレヒロイン声優と同じ誕生日と言うほどだ。

「ほんと、俺も妹がほしかったぜ。義妹ならなおの事グッドだよ」

ここが女子もいるお昼時の教室であるという事を思い出してほしい。そんな風に考えながら平沢の話を完全に右耳から入れて左耳から流しておる俺は瀬川慧人<sup>せがわ けいと</sup>。通知表には時たまうがあるくらいの特筆する所など特にはないどこにでもいる普通の学生だ。

「なあ、そう思わないか？」

誰に同意を求めているのだ。と問いたいのが、その妙に輝いている瞳は間違いなく俺に注がれている。こういう時のこいつにへタな事を言つとキレられるので、俺はとりあえず黙って購買で買ったやきそばパンを頬張る。ちなみにオタクという奴は自分の発言に妙な自信とプライドを持っているので、特に考えもせずそれを否定すると本気でブチギレられる。オタク相手に軽はずみな言動は慎むように。

「わかったわかった。お前の妹至上主義や良くわかったから、さっさと弁当食え。ほとんど食ってないだろ」

「悪い悪い。はあ、これも妹が作った手作り弁当なら良かったのに」

本気で悔しがりながら、平沢は母である平沢義子<sup>よしこ</sup>46歳が作った冷凍食品満載の弁当をようやく本格的に食べ出した。

さつきからずっと妹についてうるさかった平沢をうまく黙らせたのは隣にいるこの相島健太<sup>あいしま けんた</sup>。サッカー部で1年生ながらレギュラー入りしているすごい奴だ。顔もそこそこカッコいいので、一応モテ組に入る。

俺と平沢と相島の三人は同じ中学出身であり、中学の頃からこうして三人でつるむ事が多かった。凡な俺とオタクな平沢、サッカー優等生の相島と全く別の生き物のような三人であつたが、何となく話しているうちにこんな関係を築いてしまった。

昼休みにこうやって飯を食うのはこの高校に入ってから。普段から時々平沢は「ツンデレってサイコーだよな」とか「電波系の彼女ってどうやって作れるんだろ」とか突然ぶっちゃける。そしてそのたびに俺と相島は平沢の話を適当に流していた。真面目に聞くほど、俺達はオタク色には染まっていない。

「はあ、妹マジでほしいなあ……」

完全に危険発言をしている平沢。いつかこいつが小学生女児の誘拐事件を起こしたら「いつか絶対すると思ってました」と答えようと心に決め、これまた購買で買ったパック牛乳にストローを挿して飲む。

「まったく、何で俺の家には妹がないんだよ。いるのはクソ生意気な弟。リアルホームには俺が安らげる場所はないぜ」

平沢の弟は生粋の野球少年。少年野球チームに入って全国大会にも出た事もある将来有望な投手だ。明らかにこのダメ兄貴よりも家で安らく権利はあるだろう。むしろ黙れ平沢。

「瀬川はいいよな。マジで妹がいるんだからよ、それも超かわいいじゃん。うらやましいぜ」

冗談ではなく本気で言うのだからこいつは面倒だ。俺は適当に「別に」と答えておく。ヘタな事を言っではいけないという対オタクとの会話術は忘れてはならない。

実際問題、こいつが抱いている妹という幻想はこの世には存在しないと俺はあえてここに宣言しよう。まず妹〃かわいいという方程式は決して成り立たない。妹がブスって事も十分ありえるし、大概は妹なんて凡な顔立ちだ。誤解しないでほしいが、これは妹〃かわいいと思っている頭に虫が湧いている平沢の幻想を叩き壊しているだけに過ぎない。

だが、同時に妹がかわいいという場合もある。俺の場合はまずこれが当てはまるだろう。

俺の妹は容姿は本当に美少女だ。雑誌とかに載っていてもおかしくないくらいにかわいいし、よく告白されるとかぶっちゃけているがそれも本当だろう。

だが、外見がいくら良くても性格は至って最悪だ。年上である俺に対して何の尊敬の念も抱いていない。むしろ抱いているのは嫌悪感と見た。面倒な母がよく俺の衣服と一緒に妹の洗濯物を洗うたびに激怒している所を見るとそう思っても不思議はない。

平沢が言っていた妹が兄の事を「お兄ちゃん」と呼ぶ。これはまあ間違いではない。実際に俺も呼ばれていた頃もある。ただし、小学校低学年までの事だ。小学校卒業する頃には「兄貴」に変わっていたし、最近は呼び方すらもなく「ねえ」とか「あんたさ」とか言う事が多くなり年上に対する敬う気持ちは一切なくなった。

この実在する妹の話を一度平沢にしてやるのもいいかもしれない。だが、曲がりなりにも俺は一応こいつの友達だ。友の生きる糧を打ち砕く事は、いくら何でも心が痛む。なんて事はなく、ただ面倒なだけだ。

「確かに瀬川の妹はかわいいよな。お前と同じ血筋から生まれたとはとても思えないぜ」

「俺はどうやら橋の下に捨てられていた所を拾われたらしい」

「それはむしろ妹の方だろ？ あの普通のおばちゃんからあんなかわいい子が生まれる事が信用できないぜ」

「え？ マジで義妹なのかッ!？」

一人無駄にテンションを上げている平沢を無視し、俺はやきそばパンを片付けて牛乳を一気に飲み干す。そしていつまでもうるさそうな平沢を黙らせようと、午後の数学の小テストの為に問題集を開いた。

「平沢、これわかるか？」

「んあ？ ああ、こんなの簡単じゃん。まずこの公式に」

なぜこのオタクが学年1位の成績を誇るのか、これは俺達にとって永遠の謎である……

放課後、俺は一人で家に帰っていた。相島はサッカー部の練習、平沢もアニメ・マンガ研究会という適材適所とも言うべき部に出ているので、帰宅部である俺はこうして一人で帰る事が多い。

学校からスクールバスで最寄り駅まで行き、そこから電車に揺られて30分ほどの駅で降り、自転車に乗ってこれまた駅から10分くらい走ると家に着く。住宅街に見事にマッチする至って普通の一軒家。これが俺の家である瀬川家だ。

「ただいま」

一応言っておくが、特に返事など期待していない。親父は仕事だし、母もこの時間帯は近くのデパートでパートをしている。別に父の給料が安いのではなく、純粹に働くのが好きという変わった人間なのだ、母は。

靴を脱いで二階の自室へ行こうとした時、階段を誰かが下りて来た。それは誰もが振り返るような美少女こと、我が瀬川家の伝説となりつつある我が妹、瀬川七海<sup>ななみ</sup>であった。

美しく整えられた端正な顔立ちと愛くるしい瞳、白い肌と細い手足、でも出る所はしっかりと出ており、最近染め出した茶髪も今時つ子ばくてセーラー服が良く似合う。小説とかなら嫌でもこういう表現をするであろうが、別に俺は妹をそういう角度から見ている訳ではない。平沢じゃあるまいし。

七海は階段を下りて来る途中で俺の存在に気づいたのだろ。そ



して次の瞬間、

「チッ、何でこんなに早く帰って来んのよ」

「家に帰って来たばかりの兄貴にいきなり舌打ちかよ」

どうだ平沢。これがお前の抱いていた妹の本当の姿だ。わかったか？ 世の中ゲームやアニメに出て来る妹なんて存在しないという事がこれでわかっただろう？

兄に向かって舌打ちするヒロインなんて、マイナーにもほどがあるだろう。

七海は不機嫌そうな表情を浮かべると、持っていたケータイをフンとばかりに突き出してきた。ディスプレイには送信直前の俺宛のメールがあつた。内容は「サイダー1本買って来て」と絵文字も一切ない無骨なメールだ。

「今から送ろうと思ってたのに。マジ最悪」

「お前は兄貴をパシリにしようとしてたのか」

「はあ？ 駅のコンビニにちょっと寄るくらいでパシリとか言わないでくれる？ じゃあ本当にパシって今からサイダー買って来てよ」

今家に帰って来たばかりの兄を本当にパシリにしようとする妹。

どうだ幻想を抱く日本中のオタク達よ、これが現代に生きる妹という生き物の正体だ。

「母さんに頼め」

「だってそうすると夕方になるじゃん。今すぐ飲みたいのに」

「知るか。そんだけ飲みたいなら自分で買って来い」

「チッ、マジうざいこいつ」

兄に向かって舌打ちしてうざい扱い。しかもこいつ呼ばわり。平沢が見たら冗談抜きで死ぬかもしれないような衝撃展開の数々。まあ、俺にとっては日常だから何とも思わないけどな。

「どうでもいいけど、さっさとどけよ。上に行けないだろ」

「はあ？ あんたがどかないとあたしだって行けないのよ。バツカじゃないの？」

「ああそうかよ」

ここでムキになった所でどうせ「はあ？ 何ムキになってんの。超キモいんですけど」とか言われて言い合いは泥沼になるばかりだ。ここは年長者である俺が大人になるべきだろう。というか、こいつは無駄に負けず嫌いだから絶対に自分からは折れないだろう。伊達にこいつの兄はやってない。

俺が道を開けると、七海はようやく階段を下りた。どいてやった俺に一瞥もくれる事なく突然鳴ったケータイをポケットから取り出すと「あ、ゆかりッ!? ぐーぜん! 今あたしも電話しようとした!」と今までの無愛想ぶりから一転して超ハイテンションになる。女とはこうも裏表全開なのだろうかと俺に嫌な疑念を抱かせ、七海はリビングに去った。ドア越しにあいつの無駄に高い笑い声が聞こえる。最近、本気で父に家中を防音装備にしてもらいたいと思う。

俺は帰宅早々無駄に疲れながら、自分の部屋へ向かった。特筆して何があるという訳ではない至って普通の部屋だ。机には親父のお下りのノートパソコンが置いてある。高校生になってから手に入れた物で、もう毎日のようにネットを覗くのが俺の習慣になっている。

ちなみに、妹には最新式のデスクパソコンが買い与えられている。いくら成績が良かったからと言って甘やかし過ぎだろう。俺に対して親父は口やかましいくせに、妹は溺愛してやがる。七海も七海で猫被って甘えて調子に乗ってやがる。

親父に聞かせてやりたい。七海が前に親父と一緒に服を洗濯された時に「オヤジ臭が移ったらどうすんのよッ!」と母に激高していた事実を。あの堅物もあっけなく陥落するだろう。

だが、結局はお下がりでもパソコンを与えられている身。一応親父には感謝しているからこの爆弾話は俺の心の中だけにしまっておこう。何て親孝行者なんだ俺は。

そんな事を考えながら、俺はいつものようにネットに繋ぐ。別にブログをやっているでもない俺は、適当に動画サイトや気になるサ

イトを見て回る。俺の部屋に妹なんてもう半年近く入って来てはいない。その半年前の時も辞書を借りに来た程度だ。

どうだ平沢、これが本当の兄妹という奴だ。

俺と七海いもつとの関係はこのまま冷え切ったまま変わらないと俺は思っていた。

だが、転機というのは俺が望まなくても勝手にやって来るのであった。

## 真実と虚偽の妹

2月に入り、世間はすっかりバレンタインムード全開だ。見ていてイラッとするのは俺だけではないだろう。

教室で平沢はバレンタインについて熱く語っていたが、残念ながら君にチョコを渡そうなどと考える女子はいないだろう。いるとしてもそれはきつとボランティア精神に違いない。この面子でチョコをもらえるのは相島くらいのものだろう。相島は中学の時に女子数人からチョコをもらっている。

俺ももらった事はあるが、あれはクラスの男子全員に委員長が配った簡単な手作りチョコだ。嬉しくない訳ではなかったが、隣で平沢が号泣していたのでちょっと感動が薄れていた事はよく覚えている。

その日、俺は妙に冷える空気に身を震わせながらマフラーに顔の下半分を埋めるようにし、コートに手をつ込んで寒さと戦いながら道を歩いていた。体は寒いが心はポカポカだ。何せ今日は楽しみにしていたお気に入りのマンガの最新刊発売日。この日をどれだけ楽しみにしていた事か。

そんな感じで少しかねながら歩いていると、突然ケータイが鳴った。鳴ったといっても授業中に鳴らないようにマナーモードをしているので実際に鳴った訳ではないが。

取り出して見ると、サブ画面にはCメールのマークと発信者の名前が出ていた。

「七海か……」

どうせまたジュースだのお菓子だの買って来いって事だろう。買って帰らないとうるさいので仕方なく買って行くかとリストを確認しようと内容を見る。すると、中身は意外なものであった。

「ああ？ 何だ？」

メールを開くと短く《噴水公園、すぐ来て》と書いてあった。妹

から買い物リスト以外のメールが来るなんてずいぶんと久しぶりだ。前に二度ほど傘を忘れたから傘を持って来たとメールが来た事があったが、別に今日は寒くはあるが晴れている。それに場所が俺も三年間通った中学ではなく、ここからさほど遠くない場所にある噴水公園と来た。

メールの内容がいつもと違う事に、俺は少し気になった。と言っても誤解しないでほしいが、別に心配をしている訳ではない。普段と違う物があれば気になるのは当然の反応だ。それに、俺は七海を心配するほどあいつの兄である事を誇りに思っている訳ではない。むしろ逆だ。

だが、ぐだぐだ考えていてもどうしようもない。行かなかったら後で永遠と文句を言われかねないのでマンガはとりあえず諦めて仕方なくいつもは真っ直ぐ行く十字路を右折して噴水公園に向かう。何だかんだで、俺って結構妹に甘いなとちょっと思ってみる。

噴水公園はその名の通り公園の中央に噴水のある結構大きな公園だ。小学校からも近いし、緑も多い為に放課後の時間帯には多くの子供がサッカーをしたり鬼ごっこをしたりと賑わいを見せる。

だがその日はなぜか子供の姿が見えなかった。代わりに、噴水の横には私服姿の七海と見知らぬ男子が立っていた。長身で、かなり整った顔立ちをした、まさに美青年という感じだ。

「誰だ、あいつ」

俺はとりあえず二人の方に近づいた。すると、俺の存在に気づいた七海が振り返り　　パアツと笑顔を華やかた。

「慧人君ッ！」

「……は？」

今、俺は名前を呼び捨てにされなかったか？　今まで「兄貴」とか「お前」、「あんた」と散々呼ばれて来たが、名前を呼ばれたのは初めてだ。というか、何で？

七海は小走りで駆け寄って来ると、ぷんぷんと怒る。

「もうッ！ 約束の時間はとくに過ぎてるんだよ？ほんと、慧人君は本当にまったく！」

「……は？」

約束なんてしてないだろうが。こちらお前に突然呼ばれて意味もわからずここへ来ただけの身だぞ。

「この埋め合わせはしっかりしてもらうんだから。あとでパフェひとつおごりね？」

そう言うのと、途端に表情を変えて今度はえへッと笑顔を華やかせる。おい、あまり近づくな。 teme の笑顔なんて気色悪すぎるってんだ。一体何を企んでやがる。

いつも親父に向けている時以上に猫被りまくっている七海に若干引いていると、ふと先程から黙ってそばに突っ立っている男子がどこかつらそうな表情を浮かべているのに気づいた。ていうか、だから誰なんだよこいつは。

すると、七海はくるりと振り返って男子に向かい合った。

「あ、鶴城先輩、紹介しますね」

刹那、七海はグイツと俺の手を引くとしがみ付いてきた。そして、こつぶっ放しやがった。

「この人があたしの彼氏の、慧人君です」

「……は？」

今までこいつには散々色々と驚かされて来たが、今回のそれは今までと違って群を抜いていた。

どこの世界に自分の実兄を彼氏だと言い張る妹がいるか。そんなものがあるのは異次元である二次元世界くらいなものだ。現実世界であるこの世界においてそれは絶対じゃない。

すると、七海は困惑している俺の耳元に唇を寄せると、

「いいから黙って私に合わせて！」

すばやくそう言うと、七海はまたも猫被りな笑みを浮かべて鶴城君とか言う男子の方へ向く。意味がわからないが、とりあえずここは黙っておいた方が良さそうだ。

一方、鶴城君は相変わらず辛そうな表情を浮かべながら七海を見詰めている。すると、俺の方を見てきた。その瞳は先程までの憔悴し切っていたものからなぜか憎き敵を見るようなものに変わっていた。

「あなたが七海さんの彼氏というのは、本当ですか？」

とつさに否定の言葉が口から漏れ掛かったが、何とか堪えた。とりあえずここは七海の言うとおり合わせた方が良さそうだ。

「あ、ああ」

「失礼ですが、お名前は？」

「ああ、瀬川慧人だけど」

「瀬川？ 七海さんと同じ苗字ですね」

「ぐ、偶然でしょッ！？ 同じ苗字のおかげで知り合ったというか……、ちよつと待っててッ！」

「ぐおッ！？」

突然足を思いつ切り踏み付けられ悶絶する俺の首根っこを掴み、七海はグイッと無理やり耳を引き寄せる。

「あんたバカじゃないッ！？ この状況で本名乗るなんてありえないでしょッ！？」

「な、何でだよ」

「どこの世界に苗字が同じカップルがいるのよッ！」

七海の至極正論な意見に俺は「そ、そうか」と納得する。例えば鈴木や佐藤だとしてもその可能性は天文学的数値となるだろう。ヤバイ、一步目から踏み外したっばい。

俺の失敗を何とか誤魔化そうと、七海は慌てた様子で次の言葉を言う。

「ほ、ほら先輩。あたしウソは言ってますよね？ これでわかってももらいましたか？」

鶴城君はしばらく俺達を見て何かを考えていたようだが、やがてフウとため息を吐いて首を横に振った。

「いえ、やはり信じられません」

「ど、どうしてですか？」

鶴城君からは見えないだろうが、七海はこめかみがピクピクと動いていた。笑顔の裏には恐るべきイラだちと怒りの炎が燃え盛っているのだろう。こっちにとばっちりが来そうで気が気でない。

「七海さんに彼氏がいるなんて話、聞いた事ありません。あなたの親しい友人全員をリサーチしましたが、そのような話は一切浮かび上がりませんでした」

おいおい、普通そこまでやるか？ 若干ストーカーに近い感じがするぞこいつ。

「そ、それは彼氏がいるなんて恥ずかしくて隠していたからで……」

「……確証はありません。しかし、先程からあなた方二人の様子を見る限り、とても恋人同士には見えないのです。もしかして、今回の為に臨時で彼氏役を立てたのですか？」

「そ、そんな訳ないじゃないですか……」

もう維持するだけで必死という具合で笑顔を何とか顔に貼り付けている七海。今俺がこいつの心の中の声を代弁してやるとしたら「マジいい加減にしゃがれつてのッ！ ウザイウザイウザイウザイッ！」という具合だろうか。

「と、とにかくあたし達これからデートなんです！ これで失礼します！」

そう言つて、七海は俺の手を掴んで逃げるように走り出した。鶴城君は追い掛けるような事はしなかったが、ジッとこちらを見詰めている。逆に怖いぞおい。

走りながら、七海は小声で「マジいい加減にしゃがれつてのッ！ ウザイウザイウザイウザイッ！」とつぶやいていた。どうやら俺の予想は見事に的中したらしい 当たったのに何にも嬉しくないが。

俺は七海に手を引かれながら、噴水公園を出た。

駅前の大通りまで来た俺と七海。周りにはお昼時とあって多くの



人達が行きかっている。そんな中、七海は人の目を気にしつつも先程までのブリツ子が完全に崩壊していた。

「チッ、マジうざいあいつ。チッ、マジあり得ないんですけど」

「少し落ち着け。それと舌打ちの連発はやめてくれないか？ 心臓に悪い」

「はあ？ あんたの心臓が止まろうが破裂しようがあたしには何の関係もないんですけど」

「……どっちにしても、俺は確実に死ぬのな」

いつもの事ながら呆れるが、今日の七海はいつにも増して機嫌が悪い。まあ、あんな事の後だから気持ちにはわからなくないが。

「それにしてもよ、あいつ誰だ？ 先輩って事は、学校の先輩か？」

俺の問いに、七海は言うべきか言わないべきか迷っているようだ。ここまで巻き込んでおいて言わないという選択肢がある事に驚きだよおい。

「あいつはウチの学校の三年の先輩」

「という事は、俺の一つ下って訳か」

「あいつ前からあたしに付きまとうて交際を求めて来やがんの。あたしマジあいつ眼中にないから一応波風立てない程度に断ってたんだけどさ、あいつマジしつこいの。マジ死ねって感じ」

なるほど。何となく二人の会話を聞いて予想はしていたが、そういう事だったか。だが、確かにあいつはちょっとな。友人にもしたくないタイプかもしれない。

「それでさ、今日は休みだからって本屋に行った訳よ。そしたらそこでバツタリ出くわしちゃってさ。今から遊びに行こうとか死ぬほどしつこく迫ってきて、つい「これから彼氏とデートです」って言うっちゃったのよ」

疲れたように、そして自分の失態に呆れるように七海はため息を吐いた。

まあ、あれだ。よく刑事ドラマとかにある無実の罪なのに何時間も眠らせてもらえずに脅しのような不法取調べをさせられているう

ちに、この状況を逃げ出したいが為にやってもいない罪を自白するあれに近いものだろう。つまり、よっぽどあいつが嫌だったのか。

「彼氏がいるって言えば大概の奴は諦めんじゃん？ 普通はそうでしょ？ でもあいつ彼氏に会わせるとか言いやがって。本当に彼氏がいるのか疑わしいとか言ってるさ。マジ失礼だし……まあ、実際いないんだけどね」

「それで俺に代役を頼んだ訳か」

「そういう事。それであいつの隙についてあんたにメールしたって訳。さすがにマジで彼氏見せたら引くと思ってさ。危なかったけど、何とか誤魔化せたわ」

「……何というか、お疲れ様」

「ほんと、マジ疲れた。ああ、最悪の休日だったの」  
そう言って七海は再び舌打ちをする。

散々だったのは完全なとばっちりである俺の方だが、それはあえて言わないでおく。今の機嫌から見て確実にブチギレられるのは火を見るより明らかだ。それに、今回はかりはさすがに同情する。あんなストーリー<sup>まが</sup>紛いの奴と一緒にだったのだから、不機嫌になるのも疲れるのも仕方がない。さっき言った「お疲れ様」だって、柄に合わないけど本心だったしな。

今日ばかりは大目に見てやろう。そう思った。

「あ、もうあんたに用はないから帰っていいわよ？ っていうか離れてくれない？ マジうざい」

前言撤回。一瞬でもこいつに同情した俺は万死に値するぞゴラ。

やはりこいつはマジで嫌な奴だ。こんな奴と一緒になんてこっちら願い下げだったの。

「ああそうかよ。じゃあな」

俺はとんだ目に遭ったと思いつながら本来の目的である本屋に向かうと踵を返す。その時、俺は信じられないものを見た。すぐに再び前を向くと一人でスタスタと歩き進む七海に駆け寄る。

「おい七海」

「ああ？ 何ついて来てんのよ。帰れって言ったでしょ？」

「状況が変わったんだよ」

「はあ？」

「さっきの、鶴城君だっけ？ あいつがついて来てるぞ」

「はあッ！？」

条件反射的に振り向こうとする七海を慌てて止める。

「バカッ！ ここでこっちが気づいたのを悟られんのはマズイだろッ！？」

「うッ……、それもそうよね」

七海はうなずくと、ポシェットの中から手鏡を取り出した。鏡は女の必需品と言うが、本当にどんな時も携帯しているのだとちょっと感心。

手鏡で髪を直しているフリをしつつ、七海は背後を確認した。そして次の瞬間、額に怒りマークが浮かんだ。

「ちょ、ちよつと信じらんないッ！ 何よあいつッ！ ストーカーっぽいとは思ってたけど、これじゃ本当にストーカーじゃないッ！ 頭イカれてんじゃないのあいつッ！？」

俺も向こうに気づかれないようにそつと後方を確認する。鶴城君は俺達から5メートルほど離れた場所からついて来ていた。それもかなり堂々としている。逆にそっちの方が怪しまれないと踏んだのだろう。実際、俺もたまたま発見できただけであんな堂々とされていたら逆に気づかなかっただろう。

「ど、どうする？ このまま逃げるか？」

こういう場合はとにかくこの場を離れるのが一番だ。そう考えて提案したのだが、七海はブンブンと首を激しく横に振った。

「それはダメッ！」

「な、何でだよ。こういうのは逃げた方が安全なんだぞ」

「ここで逃げたらあたし達が恋人同士じゃないって宣言するようなものでしょッ！？ それはマジでダメなのッ！」

確かに、向こうは疑ってはいるものの一応こちらの行動をデートだと思っているのだろう。それなのにいきなり二人して逃げたらそれこそその疑心に火をつける結果になる。この場は逃げられても、後々に七海自身が大打撃を受けるのは間違いない。

「だったらいつその事あいつにしっかり断ればいいだろうが」

「んな事できる訳ないでしょッ……」

「何だよ」

七海は再びため息を吐く。

「あいつあの通りイケメンじゃん？ それに前期生徒会長だから人望も厚くて生徒教師問わず慕われてる訳。そんな奴を下手にあしらったりでもしたら、あたしの学校での立場や評判に傷つくじゃん。そんなの絶対に嫌なのよ」

「……お前、やっぱ学校でも猫被ってたんだな」

「失礼な事言わないでくれる？ こっちの方がバカな連中を利用するのに具合がいいのよ。女なんて大体こんなもんよ」

心の底までドス黒いな、おい。というか、最後の部分は聞かなかった事におこう。その方が今後の人生の為になるような気がする。

「じゃあ、ほんとどうすんだよ」

「……不本意だけど、このままデートのふりをし続けるしかないわよ」

「不本意って。それは俺のセリフだぞ」

「はあ？ 何言ってるんのあんた？ あたしこんなにかわいいのよ？ 世界中の間抜けな男が涙を流して大喜びするようなシチュなのよ？ むしろ感謝してほしいくらいよ」

いくらかわいい娘だとしても、こんなドス黒い娘と一緒にいても嬉しくもない。というか、それ以前に俺達は兄妹である。逆に大喜びするようであつたら色々な意味で終わりだ。

その時、何気なく振り返ったという感じで後ろを一瞬だけ確認する。すると、尾行して来る鶴城君が疑うような目でこっちを見詰め

ていた。

「おい、それよりも何かあいつ疑うような目で見て来てるぞ」

「はぁッ!？」

七海はすぐさま手鏡で後方を確認し、盛大に舌打ちする。

「何あれッ!？ 怖いしキモいんだけどマジでッ!」

「ど、どうするよ。疑われ始めてるぞ」

正直な話、俺は彼女がいた経験がない。その為、デートなんてものは全然わからない。だから鶴城君から見てこれがデートに見えない理由がよくわからない。こうして並んで歩くだけではダメなのだろうか？

「チッ、仕方ないわね……」

そう言って七海はグイッと俺の腕を引き寄せると、ギューッと抱きついて来た。

「お、おいッ!」

「黙って従つてよ。恋人同士なら腕くらい組むでしょ普通」

唇を尖らせながらそう言う七海は少し頬が赤いように見られた。

まあ、いくら俺相手でも男の腕にしがみ付くというのは恥ずかしいのだろう。こいつに人並みの感性がある事に驚いたのは内緒だ。

「チッ、マジ最悪。こんな奴にこんな事なくちゃいけないなんてほんと厄日だわ」

そう言う七海に多少イラッとはしたが、何というかこれはでこれであり悪い気はしなかった。何というか、こいつは本当に俺の妹なんだなあと忘れ掛けていた事を思い出したというか。とにかく、七海と腕を組んだ記憶はこいつが幼稚園児の頃しかないので、ほんと大きくなったんだなと驚く 言っておくが、決していやらしい意味ではないぞ。平沢じゃあるまいし。

だが、この行動のおかげで鶴城君の疑いは和らいだらしい。隣で七海がほっとしている。

しばしの間、俺達は慣れない行動にギクシャクしながら歩き続ける。だが、こんなんでいいのだろうか？ 腕を組んだまま無言で歩

き続けるなんて恋愛ドラマがあつたら、それはきつと放送中止になるだろう。

「……おい七海」

「何よ」

「これからどうすんだ？　このままただ歩くつてだけじゃマズイだろ」

「そ、それもそうね……えっと」

偽彼氏作戦を発案した七海もそれに巻き込まれた俺も元から本当にデートするつもりなどなかった。まさか鶴城君がここまで正しい奴だとは想定していなかったのだ。なのでもちろん何をして遊ぶとか全く決めていなかった。というか、ぶっちゃけ今も何の当てもなくただ歩いていただけだ。

七海はどうすべきか悩んでいる。驚いた事に、こいつもデートというものに慣れていなかったらしい。てつきり男の一人や二人作っているものだと思つてた。というか、本当に彼氏がない事に正直驚いている。

そんな感じで二人で悩みながら歩いていると、ファミレスの看板が見えた。高いボールの上の看板がグルグル回る、全国規模のチェーン店だ。

「とりあえず、ファミレスでも入るか？」

「あ、それいい。あたし昼食まだだからマジ空腹なんだよね」

「奇遇だな。俺も腹ペコだ」

と、珍しく兄妹の意見が一致した所で俺達はファミレスに入った。ただ、さすがに尾行しているという事もあつて鶴城君は入って来なかった。しかししっかりと外で見張っているのが確認できた。それを見て、七海はまた舌打ちする。

「マジキモいよあいつ。警察に突き出してやろうかな」

「そんな事したらお前、自分の立場が危うくなるんじゃないか？」

「冗談に決まつてるでしょ。できるならとくに自衛隊を呼んで戦車で踏み潰してるわよ」

「……自衛隊はそんな事の為に存在するんじゃないやありません」

そんな会話をしながら席の空くのを待つ。休日のお昼時とあって、店内はかなり込んでいるようだったが、何とか二人席が空いたので俺達はそこへ通される。だが、最悪な事にそこは窓際の席であった。もちろん鶴城君からは丸見えの形となった。しかし店員さん曰く今の時間帯このチャンス逃したらあと20分くらい待たないといけないらしい。この二人席だって待ちリストの前が家族ずればかりだから二人席が不要という事で早めに空いたくらいだ。

七海はものすごく不服そうだったが、一応納得して席に座る事になった。メニューを開き、料理を選ぶフリをしながら外を確認。すると、鶴城君は高齢者に優しい市長が設置した休憩ベンチに腰掛けて本を読んでいた。だが、その目はしっかりとこっちを見ている。何という執念深さだ。

「本当に気持ち悪い」

俺はこの時初めて《キモイ》と略して言われるのと《気持ち悪い》と丁寧に言うのでは後者の方がずっとひどく残酷で傷つく言葉なのだとわかった。若い女子が略して言うのにはただ短くするだけでなくこうした配慮があつての言葉なのだろうか　まあ、そんな訳ないだらうけどな。

とにかく、俺達は当初の目的通りに昼食を食べる事にして俺はハンバーグステーキセットを、七海は鶏とネギの和風ペロロンチーノを注文。それが来るまでの間、とにかく今後の事を話し合った。七海は「内容はあれだけどにかく笑つて。じゃないと怪しまれる」と言つて二人して何にも面白くない話を笑い続ける。これってどんな羞恥プレイだよ。

とりあえずこの後は近くのゲームセンターに行く事を決めた所で二人の料理が届いた。俺のはメニューの写真通りシンプルな感じのハンバーグの上に黄身は半熟で白身もプルプルの卵焼きが載ったハンバーグステーキセット。肉の味そのものを楽しめるようにと、ソースも控えめな感じのバター醤油しょうゆと値段が手頃ながら結構うまいー

品だ。

一方、七海のはたつぷりの鶏肉とネギ、キノコと刻み海苔しのが載った醤油風味の和風ペペロンチーノ。これもまた人気の絶品メニューだ。ただ、ちよつと油が多いのでどちらかと言えばメンズメニューなのだが、七海曰く「あたし食べても太らない体質だから、おいしい物しか食べない主義なの」と世界中の女を敵に回すような発言を堂々とぶつ放しやがった。

二人とも料理が来た所で、ようやく昼食となった。俺はバター醤油をハンバーグにかけてナイフで切って食べる。この店には別の店舗だが相島や平沢と一緒に入った事もある。その時、俺は比較的にれを頼む事が多い。値段が手頃なのにボリュームもあつてうまい。こんな万能料理は他にないだろう。

そういえば、最近は二人とも部活で忙しくてなかなか来る機会がなかった。その為、この味もどこか懐かしい感じがする。

「あのさ、それってうまいの？」

久しぶりの味を楽しんでいると、七海が訊いてきた。とりあえず、フォークで人の料理を指すのはやめろ。行儀悪いぞ。

「俺は好きだけだな。安くてうまいから」

「ふーん、あたしそれ量が多いから食べた事ないんだよね　一口ちようだい」

「お、おお」

七海は「サンキュ」と軽く言つてフォークで肉を切った。俺の食べているのとは逆の所を取る辺り、やはり兄とはいえ男が口にした部分は嫌だという乙女心なのだろうか。まあ、別にいいけど。

七海はパクリと口に含むと、「うーん、まあまあかな」と評価を下した。

「まあまあつて、うまいだろこれ」

「あたしは普通。でもこれでこの値段ならありじゃない？　ふうん、あんたの舌ってちゃんと機能してんのね」

「ひどい言われようだなおい」



だが、不思議とイラッとはしなかった。何というか、久しぶりに兄妹という感じがする。いや、むしろこれは本当にデートなんじゃないかと疑うようなシチュだ。これならば鶴城君も納得して

「お、おい何だあの目はッ!? また疑われてるぞおいッ!」

俺の言葉に七海は驚いたような表情を浮かべると慌てて外の風景を見るふりをして鶴城君を確認。そして、盛大に舌打ちをぶつ放す。「ど、どうしろって言うのよッ!？」

「知るかッ!」

こちらら自慢じゃないが年齢〓彼女いない暦の高校一年生だ。恋人同士っぽい事をしろと言われても、その方法すら浮かんで来ない。ヤバい、ヤバ過ぎるッ!

「くうッ、こうなったら……ッ! 兄貴いッ!」

「な、何だよ?」

突然呼ばれて伏せていた顔を上げると、目の前にズイツと何かが現れた。それはペペロンチーノがグルグルに巻かれたフオークであった。もちろん、それを持っているのは七海だ。その顔は熱でもあるんじゃないかってくらい真っ赤になっている。

「食べなさい」

「はあ?」

「いいから早く食べなさいよ!」

「な、何でだよ」

「恋人同士っぽい事すんのよッ!」

なるほど。確かにこれは恋人っぽい。恋人っぽいには恋人っぽいのだが、同時に恐ろしく恥ずかしい。自分ではわからないが、きっと俺も少なからず顔が赤くなっているだろう。

さすがにここまでやらなくてもいいんじゃないかとも思ったが、だからといって他に代案がある訳ではない。じーっとこちらを見詰めて来る鶴城君。これ以上躊躇ちゅうしよしていたら彼の不信感ほさらに増大するだろう。

七海は「早くしなさいよッ」と言いたげな瞳で俺を睨んで来る。

完全に退路は断たれた。

ここはもう、覚悟を決めるしかなさそうだ。

俺はゆっくりとうなずくと、口を開く。七海もまた小さくうなずき、震える手で俺の口の中にフォークを入れた。そのままのどを貫かれるかと思っただがそんな事はなく、フォークは引き抜かれた。それに巻かれていたペペロンチーノはしっかりと俺の口の中にある。

とりあえず、無言で咀嚼<sup>そしゃく</sup>。七海も黙ったままだ。

十分に嚙んでから、ゴクリと呑み込む。そして、

「う、うまいなこれ」

「で、でしょお〜？」

あははははと俺達は今にも壊れそうなほどギリギリの状態の笑みを浮かべる。だが、どちらの瞳も決して笑っていないかったという事だけはわかってほしい。死ぬほど、恥ずかしかった……

まるで生きた心地がなかったランチを終え、俺達はファミレスを出た。そして再び街を歩く。もちろん腕は再び組み、俺達の背後からはしっかりと鶴城君がついて来ている。

慣れない腕組みをしながら、俺達が向かった先は先程ファミレスで決めていた駅近くのゲームセンター。ここには相島や平沢とよく行った事がある。格闘モノとかレーシングとか対戦系がやはりゲームセンターではおもしろい。しかし、今回はデートという名目で来ているので間違ってもそういう系はダメだ。それくらい俺でもわかる。

という訳で、俺達は事前に決めておいたゲームに向かう。それは、ゲームセンターならどこにでもあるメジャーなもの　UFOキャッチャーだ。

「あ、このぬいぐるみかわいい！」

中にあるネコのぬいぐるみ見て七海は笑顔を華やかせて言った。

「よおし、絶対ゲットするぞお」

そう言って七海は100円玉を取り出すとコイン入れに投入する。

すると、途端に音楽が流れ出し、操作ボタンに明かりがつく。準備完了という訳だ。

七海はまず横に動くボタンを押し、クレーンの動かす。次に奥に向かつてクレーンを動かすと、自動的にアームが開きぬいぐるみを捕まえる。だが、少しズレていたのか、アームは片方だけがぬいぐるみに触れただけで、何も取らずに戻って来た。

「おっしい。リベンジリベンジッ」

再びチャレンジ。

しかしまたしても失敗してしまう。

「こ、今度こそ……」

再三100円玉と取り出してコイン入れに投入。しっかりとターゲットを狙い、クレーンを動かす。しかしこれもまた惜しい所で失敗してしまう。

「むう、何で取れないのかなあ」

頬を膨らませながら言う七海。もちろんこれも演技だが。

その時、後ろから疑惑の視線が突き刺さった。どうやらまたも鶴城君が俺らの行動を不審に思っているらしい。だが、今回は俺でもすぐに解決策を思いついた。

「代わるよ」

そう言って俺は七海の肩に手を置いた。七海は「で、でも……」と演技全開で返して来る。だんだん、こいつは女優に向いてるんじゃないかと本気で思い始めてきた。

「任せておけって。あれは俺が取ってやるから」

どうやら読みは当たったらしい。鶴城君は納得してくれたように不審な視線を引っ込めた。

だが、俺はここで大きな誤算をしていた。それは、俺がUFOキヤッチャーが全くのど素人だという事だ。

「まあ、何とかなるだろ」

とりあえず100円玉を取り出し、ゲームをスタートさせる。

一回目は失敗。まあ、これは仕方がない。

二回目も失敗してしまう。

三回目も失敗。

四回目失敗。

五回目、六回、七

「ぬおお……」

「あ、兄貴もうやめときなつて」

小声で忠告して来る七海の言葉を無視し、俺は再び100円玉を投入する。これでちょうど十回目だ。

だが、結果はもちろん失敗した。

俺はその非道な事実には呆然と立ち尽くす。

この非道な無機物の塊は、俺の千円もの貴重な大金を吸い込んだ事になる。それも、ぬいぐるみは一つも取れていないという最悪な状態だ。これは悪夢だろうか……

「あ、兄貴。もういいってば」

七海は後ろにいる鶴城君に聞こえないような小声で声を掛けてくる。

「兄貴の腕じゃいくらやっただって無駄だって。ていうか、別にあたしあのぬいぐるみ本気でほしいなんて思っていないから」

「そうなのか？」

「だって、その方が女の子的にかわいいでしょ？」

「なるほど」

「だからさ、もうやめなつて」

七海の言っている事は正論だ。確かに、今までの俺の実力を見る限りではこれ以上続けても取れない可能性の方がずっと高い。これ以上、無益な犠牲をしない為には、ここで退くのもまた正しい策だ。だが、今ここで退けば、彼らの犠牲はどうなる？ 俺の腕が至らないばかりに犠牲になった十枚もの100円玉達の死は、無駄死になつてしまふではないか。それは、彼らに対する最大の裏切りに他ならない。

だから、俺はここで退く訳にはいかないのだ。

俺は覚悟を決め、財布から100円玉を取り出す。

「ちよ、まだ続けんの？」

「ここで退いたら男が廃る。どっちにしろ、どうせこれが最後の100円だしな」

「最後つて、マジで？」

マジもマジ。大マジだ。すでに小銭入れの中に銀色に光り輝く100円玉はない。もちろん紙幣すらもない。さっきのファミレスで彼氏っぽくしようと七海の分までおごったのがここに来て大ダメージになってしまった。だが、後悔はない。むしろ最後だからこそ全力を注ぐ事ができるのだから。

正真正銘のラストチャンス。

この一度に全てを懸ける。

そんな想いを込めて、最後の100円玉を投入。

これまでに散っていた100円玉達の死を、無駄にしてはならない。

慎重にボタンを操作し、クレーンを動かす。横へ動かし、クレーンとぬいぐるみが一直線になる。そして今度は奥まで動かす。クレーンがぬいぐるみに近づくのがとても遅く感じる。意識を集中させ、狙いをすまし……

「ここッ！」

鋭く最後のキャッチボタンを押す。その指示を受け、クレーンはアームを開いてゆっくりと下がる。そして、ぬいぐるみを 掴んだ。

「あッ！」

「良しッ！」

だがここで気を抜いてはならない。無事にぬいぐるみを出口まで運んで来るまでがUFOキャッチャーなのだ。

アームに掴まれたぬいぐるみは決してしっかりと掴まれている訳ではない。紙一重という感じで、クレーンが無機質な動きをするたびに揺れ、今にも落ちそうだ。

ゆっくりと戻って来るクレーンを見詰めながら、俺は祈った  
落ちるなッ！ このまま来いッ！

そして、その想いはきつと届いたのだろう。

ネコのぬいぐるみは無事に出口まで到達。ガコンという音と共に  
取り出し口に落ちて来た。

「よっしゃッ！」

「すごッ！ やったあッ！」

大喜びする俺と七海。まさかゲームセンターのゲームでここまで  
感動できるとは思わなかった。

出口からぬいぐるみを取り出すと、俺はそれを七海に手渡す。

「ほら」

「……え？ いいの？」

「当たり前だろ。お前の為に取ったんだぞ」

「でもさ、1000円以上も使ったんだし……」

そう言っ受取ろうとしない七海。どうやら本気で遠慮してい  
るらしい。何を今更……

俺は「いいから。もらっとけって」と言っぬいぐるみを七海に  
押し付ける。

「そんな事に気にすんなって。まあ、別に本当にほしがってたもの  
じゃないんだから、いらないって言うなら仕方ないけど」

そう言っ、七海はジッとぬいぐるみを見詰める。そして一度俺  
の方を見ると、そのネコのぬいぐるみをギュッと抱き締めた。

「じゃあ、これもらうね？」

「おう」

「ありがとう慧人君。これ、大切にするからね」

「お、おう」

そう言っ、七海は満面の笑みを浮かべた。

その笑顔は、どこか演技じゃない気がしたのは気のせいだろ  
うか……

という訳で、お金も底を尽いたので今日の偽装デートは終了した。夕日が辺りをオレンジ色に染め上げる頃、俺と七海は振り出しとも言つべき噴水公園に戻って来ていた。手はずではここで二人はバラバラの方向から帰る事になっていた。学生身分の恋人同士が同じ家に帰るのはいささか怪しいという七海の提案だ。

しかし、ここで予想外の出来事があつた。

噴水公園まで戻って来ると、すでに背後には鶴城君の姿はなかった。

「あいつ頭いいから、塾でも言つたんじゃない？」

と七海が言うので、とりあえず一安心だ。

もう偽デートも終わり。七海は鶴城君の姿がない事を確認すると組んでいた腕を外し、うーんと背を伸ばす。慣れない腕組みは本当に疲れる。

「ふう、やつと茶番も終わりね」

「それは俺のセリフだぞ」

「何よ。こんな美少女とデートごっこができたんだから、あんたはありがたいくらいでしょ？」

「妹とデートごっこして喜ぶほど俺は終わってねえよ」

そう言つて俺は腕時計と確認すると、もう結構な時間になっていた。うちの親父は帰宅時間につるさい。そろそろ帰った方が良さそうだ。

「じゃあ、あたしは先に帰るから」

そう言つて七海はスタスタと歩いて行き、木々の陰に消えた。ほんと、自分勝手な奴だ。

俺はとりあえずトイレに行って用を済ませると七海から五分ほど遅れて公園を出た。辺りはすっかり夕日も沈み、星が煌く夜になっていた。この時期は本当に日が落ちるのが早い。

少し寒くなつて来た。俺はコートの襟を立てて首に冷氣が当たらないようにしながら早足で家に向かう。

もう七海は家についた頃だろう。

何かすごく迷惑であつたが、不思議とあまり嫌な感じはしなかった。

何というか、久しぶりに妹と接する事ができてちよつと嬉しかったのかもしれない。決して平沢のような変態ではないが、唯一無二の兄妹なんだから、仲が悪いよりは良い方がいいに決まっている。今日だけは、一瞬でも仲のいい兄妹でいられたのだ。体も懷も寒い  
が、心はぽっかぽかだ。

家に帰ればまた冷め切つた兄弟関係に戻るが、それでもそれはきつと以前とは違うものになっているだろう。

早く家に帰って温まりたい。そんな事を考えながら歩いているとケータイが鳴つた。取り出してサブ画面を見ると、そこには『自宅』と書かれていた。

母さんだろうか。一体どうしたのだらうと思ひながら俺は通話ボタンを押した。



## 悲壮と笑顔の妹

寒空の下、俺は真っ白な息を吐き出しながら全速力で走っていた。冷たい空気が肺に入るたびにズキズキと痛み、足は慣れない全速力でガクガクになっている。

さっき母さんから電話があり、七海がまだ家に帰っていないと言われた。俺よりも先に家に向かったはずなのに、まだ帰っていないというのはおかしい。

俺はすぐに七海のケータイに電話を掛けたが、信じられない事に電源が切られていた。こちら辺は平地なので電波が届かない場所なんてないので電源が切れているのは間違いなかった。

何かがおかしい。嫌な予感がする。

俺はとにかく最後に七海と別れた噴水公園に向かった。俺はそこで七海と別れた際、あいつが実際に公園を出た所を見ていない。もしかしたら、公園に何か手がかりがあるかもしれない。

「くそッ！ 手間を掛けさせやがってッ！」

何を焦っているのか。

何を慌てているのか。

何を熱くなっているのか。

俺は七海<sup>いもこと</sup>なんてどうでもいいと思っていたではないか。なのに、何であいつの為に俺は今必死になって走っているのだろうか。

あいつは嫌な奴で、兄であり年長者である俺に無遠慮で接してくる生意気な奴だ。ここ最近、あいつとまともに話した記憶なんてほとんどないほど、俺達は互いに関わりを断っていた。

あんな奴放っておけばいい。こんな所で俺が必死になったって、俺には何の得もない。そんな事わかっているのに、俺の心臓は激しく脈打ち、ギシギシと痛む。

「……仕方ないだろッ！」

放っておくなんて、できない。

いくら生意気な奴でも、小悪魔のようなひどい奴でも、平気で人を罵倒する奴でも。あいつは

「俺の妹なんだからよッ！」

全速力で走り、何とか噴水公園の中に入った。ここはライトはあるものの周りを囲むように木々があるので住宅街の明かりが届かずに薄暗い。懐中電灯の一つでもあればいいのだが、残念ながらそんなものはない。ケータイのライトではいささか頼りないが、ないよりはマシだ。

ケータイのライト機能を使って辺りを探す。最後にあいつを見たのはこの木々に隠れる時だ。

何かないか。

俺は特に地面に明かりを当てながら歩いた。すると、草むらの方に何かが落ちていたのが見えた。急いで駆け寄って手に取る。それは、昼間七海にあげたネコのぬいぐるみであった。

「何でこんな所に……」

俺の中で、不安がどんどん膨れ上がる。

一体、七海の身に何が起きたのか。

その時、ぬいぐるみのあった草むらの奥で音がした。俺は反射的に走り出すと、草むらに突っ込んだ。細い枝を折りながら突き進むと、壁のようになっていた草むらが開けた。そこには縄で手足を縛られ、口はガムテープで塞がれた七海が転がっていた。

そして、その近くには鶴城君が立っていた。

鶴城君 いや、鶴城は何か白いものを鼻に当てていた。薄っすらと見えるそれは、靴下。見ると、七海のブーツの片足が脱げて素足になっていた。

七海は俺の姿を見ると、涙目で助けを求めるように見詰めて来る。俺はそれを一瞥すると、ゆっくりと振り返る鶴城を睨み付ける。

「テメエ、何してやる」

自分でも驚くほど低くて重い声。胸の中に渦巻く怒りは、今まで

感じた事がないほどに激しく、熱く燃え盛っている。

「あなたですか」

靴下を鼻に当てていた時の不気味なくらいうつとりした表情が消え、激しい憎悪が変わりに現れる。瞳は鋭利な刃物のように鋭く、それは明らかに《敵》とみなす相手に向けるもの。

「僕と七海さんの邪魔をしないでいただけますか？」

「そんな事できる訳ないだろッ！ 俺は」

「兄だから、ですか？」

「ッ！？」

突然鶴城から出された単語は俺の予想外のものであった。鶴城は俺達が兄妹だという事を知らないはずなのに。

俺がうろたえているのを見ると、鶴城は冷静に何かを取り出す。

それは七海のケータイであった。

「七海さんが最後のメールを送った相手はあなたですね？ 公園に来るよう彼女は頼んでいる」

そう言って鶴城はケータイの画面を俺に見せる。そこには、確かに俺に送られてきた七海のメールが映し出されていた。ただし、宛先が《バカ兄貴》となっではいたが。

「これは明らかにお兄さんを彼氏役に立て、僕のアプローチを断ろうとした証拠。ですよ？ 七海さん」

振り返った鶴城に、七海は力なくうなずいた。否定できるような要素は、何一つないのだから。

「あなたは僕を騙した。人を騙すのは、人として最低な事だと思いませんか？」

「ふざけるなッ！ それが拉致ってる奴の言うセリフかッ！」

怒号を放つ俺を鶴城は煩わしそうに一瞥し、再び七海の方へ向く。完全に無視かよ……ッ。

「しかし、僕は自分で言うのも何ですがとても頭がいい。一時の感情だけで利益を損失するような愚かな真似はしません。そこで、僕は七海さんに騙した事を許す代わりに僕との交際を提示したのです。

財力、容姿、頭脳。全てが完璧な僕の彼女になる、こんな素晴らしい条件他にはありません」

さも当然のように言い張る鶴城。俺は反吐が出そうになった。ここまで自分の事を持ち上げる奴も珍しい。ナルシストもここまで行くとしたの変態野郎だ。

「しかし、七海さんはそれを断った。何と愚かな選択をしたのか、彼女は容姿だけでなく頭も切れる人かと思っていました。が、幻滅しました。ですが、それは僕がしっかりと調教すればいいだけの事。僕の寛大な愛はそんな些細な事では揺るぐ事はありません」

そう平然と言うと、鶴城は七海の方へ振り返る。こちらからは彼の顔は見えないが、七海が「ひ……ッ」と怯えた所を見ると余程気色の悪い顔だったのだろう。

再びこちらに向き直った鶴城は、確信を得たように宣言する。

「僕と七海さんは運命の糸という繋がりが結ばれているのです。ですのでお兄さん、あなたには引つ込んでもらいたいです。これは僕達二人の事なので」

「運命の糸ねえ」

くだらねえ。本当にくだらねえ。

そんな言葉で自分と七海を繋いでいる。それも一方的にだ。何て迷惑な奴だ。虫唾が走る。

「そんな目に見えない繋がりがなんて何の役にも立たねえよ。教えてやろうか？ 本当に強い繋がりがりつて奴を」

縛られて動けず、口を塞がれて話す事もできない七海を一瞥し、俺は首を傾げる鶴城を見据える。握り締めた拳は今まで経験した事のないほどに熱く硬くなっている。胸の中で渦巻く怒りは、爆発寸前だ。

七海なんて俺には関係ねえ。そう思っていたし、おそらくこれからも変わる事はないだろう。あの程度の出来事で俺達の関係がそう簡単に進展する訳がない。世の中小説のようにうまくはいかないようにできている。

だが、どんなに足掻こうが決して変えられないものがある。それが、本当繋がりにつて奴だ。

「血の繋がりをなめんじゃねえッ！」

叫ぶと同時に、俺は地面を蹴って突貫していた。驚く鶴城の顔面に熱く硬くなっていた拳を全力で叩き込む。突然の事に回避も出来なかったのだろう。鶴城は簡単に吹っ飛んだ。

地面に伏した鶴城を睨み、言ってる。

「どんなにクソ生意気な娘でもな、こいつは俺の妹だ。そして、俺はこいつの兄貴なんだよ」

俺はすぐに振り返り、急いで七海に駆け寄る。口を塞がれているせいで「むお……ッ！ もごおッ！」と言葉にならない声を繰り返している。俺はまず最初に口のテープをはがしてやった。

「プハッ！ はあ……はあ……」

「大丈夫か？」

「う、うん」

「待ってる。今縄を解いてやるからな」

そう言っただけは七海を縛っている縄を解こうとする。だが硬く結ばれているらしくなかなか解けない。その間、七海は不思議なくらい静かだった。まあ、あんな怖い目にあっただけ後なのだから仕方がない。

「……ねえ、兄貴」

「ああ？」

「何で、来てくれたの？」

「はあ？」

「だって、あたしあんたにひどい事ばかり言ってたし、バカにしたり、こいつがあたしの兄貴なんてマジありえないとか思ってたのにっ」か死ねてくくらい」

「最後のはいくらなんでもひどいぞ」

「……なのに、何であたしなんかの為に」

ようやく縄が解け、やっと七海は自由を取り戻した。俺はふうと

ため息を一つ零すと、ポンと七海の頭の上に手を載せた。いつもなら絶対「触んな変態ッ！ 髪が腐るッ！」とか言って激しく嫌がるだろうが、今だけは何の抵抗もしなかった。

「さっきも言っただろ？ 何度も言わせるな」

そう。確かにこいつは俺の事を煩わしく感じていてうざいとかキモイとかマジ死ねとか思っているのかもしれない。ていうか確実に思ってるだろ。

俺だってこんな見た目じゃなく内面がかわいくない妹なんて知ってたこっちゃねえ。その気持ちは今だって変わらない。

だがな、俺達の間にはどうしても変えられない絶対の絆があるんだよ。それが例え、互いを罵り合う兄妹でもな。

「お前は俺の妹だ。俺はお前の兄貴だ。兄貴が妹の危機を助けるのは当然の行動だ。深い意味なんてねえよ」

そう、これは当然の行動なのだ。子供の頃、近所の悪ガキにいじめられてたこいつを三対一っていう圧倒的に不利な状況でも逃げずに立ち向かった。あの時と変わらない、兄貴の務め。今俺はそれを果たしただけに過ぎない。

「ほら、くだらねえ事言っでないでさっさと立て。さっさと逃げ

」

刹那、後頭部にすさまじい一撃を受けて俺は地面に叩き伏せられた。痛えッ！ マジ頭が割れるってのッ！

予期していない一撃、それも頭部に受けたせいか激痛と共に視界がグラグラする。何とか手をついて起き上がろうとした時、今度は脇腹に激痛が走った。それが蹴りだとわかるのにそんなに時間は掛からなかった。

「ぐう……ッ！」

「よくもやってくれましたね。凡な能力しか持たない下衆ゲフの分際で」

脇腹を押さえながら身を起こすと、そこには鶴城が立っていた。

俺の拳が当たったせいか、唇の端から血が出ている。しかし、その表情は何のダメージもありませんと言いたげに涼しいもの。だが、

こちらを射抜く瞳だけは激怒に燃え盛っている。

「僕と七海さんの愛を邪魔した拳句、僕の顔を殴りましたよね？」

七海よりも自分の顔かよ。ナルシストも大概にしゃがれ……ッ！

「あなたのような世間の何の役にも立たないゴミのような人間が、僕のような素晴らしい将来が約束された人間に手を出すなど、万死に値しますよ？」

そう言つて、鶴城は立ち上がるうとした俺の顔面を横蹴りした。

とつさに腕でガードしたが、勢いだけは殺せず俺は無様に地面に転がる。ガードした腕がめちゃくちゃ痛てえ。

「隠していた訳ではありませんが、僕は少しですが武術に心得があるんですよ？ キックボクシングとボクシングはもう3年近く続けているんです。あなたの動きを見る限り、完全なド素人のようですね」

そう言つと鶴城は再び俺の横腹を蹴りやがった。キックボクシングをやっている奴が素人相手に蹴りを入れるのは凶器を振り回してのほとんど変わらねえ。マジで死ぬほど痛てえ。

奴がとりあえず人並み以上の武術を心得ているのは理解できる。

そして、俺は特に武術をやっている訳でも体育の成績がすこぶる良い訳でもない凡な高校生だ。どちらが有利で不利かくらい、小学生でもわかるつての。

「もう一度言います。僕と七海さんの邪魔をしないでもらえますか？ 今ならまだ寛大な心で許してあげましょう。ただし、土下座くらいはしてもらいますか」

「クソが……ッ！ んな事死んでもしねえつての！ 逃げろ七海ッ！」

地面に伏しながら睨む俺の視線など小さな虫けら程度にしか思っていないのだろう。鶴城はやれやれとばかりに首を横に振ると、冷めた目で俺を見下す。

「無能は黙って支配する者に従えばいいものを。ではここで眠ってなさい」

そう言つて、鶴城は俺の顔面に向かつて今度こそ本気の一撃をブツ　飛んだッ！？

突如目の前で鶴城が吹っ飛んだのを見た。勢い良く吹っ飛んだ奴の体はそのまま背後の木に激突する。どうやら頭を強打したらしく、鶴城は頭を押さえて悶絶している。

呆氣に取られる俺の前に、真っ白な素足が現れる。見上げると、それは見知った少女の背中であつた。

「まったく、兄貴つてほんとダメダメよねえ。マジ役立たずつて感じ？」

そう言つてボキボキと腕を鳴らすのは、さつきまで涙目で震えていたはずの我が愚妹　七海であつた。

「つていうかマジ弱過ぎ。助けに来ておきながら返り討ちなんて、超かっこわるう」

背を向けているので七海の表情を見る事はできない。だが、口調こそいつもの通りのクソ生意氣極まりないものだが、その全身から噴き出す激しいオーラは　殺氣。

俺はその殺氣に言葉を失う。これは、七海が取り返しがつかないほど激怒した時に放たれる災厄の邪氣。こんなにもドス黒く打ち震える殺氣を見たのは何年ぶりだろうか。

「まあ、兄貴が超弱い事なんて重々承知の上よ。でもね、あんたが助けに来てくれた事実は変わらない。その事はまず礼を言うわ

ありがと、兄貴」

「お、おう」

何というか、こうして真っ直ぐに礼を言われると照れくさい。特に七海からの礼なんてほんと何年ぶりだろうか。その間が長ければ長いほど、今の感動は大きい。

「ここからはあたしに任して。これは、やっぱりあたしが決着をつけないといけないから」

そう言つと、七海は右手を引き、左手を伸ばし、腰を落として構えた。気を集中させ、己が敵一点だけを見詰める。



一方、すっかり逝っちゃってる感じの鶴城君は七海の纏う雰囲気にも構えにも気づいていないのか、七海が前へ出た事を大いに喜んでいる。

「七海さん、やっと僕の気持ちを理解して」

「はあああああッ！」

気合裂帛。

七海は無防備に駆け寄って来る鶴城に向かって渾身の掌底突きを打ち放った。その小柄な体格からは想像もできないような恐ろしい一撃。鶴城は顔面に直撃を受けて「ボゲラボベエエエエエエエエエッ！」と情けない悲鳴を上げて吹っ飛んだ。

たった一撃。

その一撃で七海は武術経験者である鶴城を伏した。

そういえば今思い出したが、七海は物心ついた頃から空手三段という隠れた経歴を持つ親父の影響で空手を習っていた。段位は、確か五段だったような……

そしてはつきりと思い出した。子供の頃、近所の悪ガキにいじめられていた七海を助けようと突っ込んだ俺はボコボコにやられ、それを見てブチギレた七海はいじめっ子三人を言葉にするのも恐ろしいほど精神的・肉体的に痛めつけたのだ。

呆氣に取られる俺を置いて、七海は倒れた鶴城に歩み寄ると、グイッとその胸倉を掴んで無理やり起こす。自分よりも何倍も体格が大きな男を軽々と持つ七海<sup>いもつと</sup>。マジで怖え……

「な、七海さん？」

「はあ？ 何名前で呼んでんのよクソが。っていうか呼吸止めてくんない？ あんたのせいで今貴重な酸素が減ったじゃない」

「うえ……？」

「っていうかマジでキモイねあんた。どうやったらそんなキモく育てるのかマジ不思議なんだけど。まああたしにはマジどうでもいい話だけどね。まあ、単刀直入に言うとなんかマジ死ねって感じ？」

「な、何を言っているんだ七海さん？ ち、違う。僕の知っている

七海さんは清純可憐な」

「はあ？ 笑えない冗談ってチョー寒いんですけど。っていうかマジキモッ」

そう吐き捨てると、七海は胸倉を掴まれて動けない鶴城の鳩尾みぞおちに連続突きを放った。しかも全てクリーンヒット。ドスドスドスドスドス……と響く打撃音は恐怖のリズム。ドスドスドスドスドスベキッ……。あ、なんか折れた音がしたぞ。

「ぐべえッ！？」

おかしな悲鳴を上げる鶴城を地面に押し倒し、七海はチツと舌打ちすると、

「マジ死ね」

そう吐き捨て、ゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシと連続して蹴りを放つ 股間に。

見ていてあまりにも痛々しい光景に、俺はとっさに自分の股間をガードした。今まで様々なマンガやドラマを見て来たが、ああもあからさまに、そして集中的に股間を蹴るシーンなど見た事がない。その激痛を想像しただけで、吐き気が……

容赦のない蹴りの応酬を股間に受け続ける鶴城はいつの間にかブクブクと泡を吹いて気絶していた。だが、七海の怒りは収まらないのか、股間を蹴って、踏んづけ、蹴って、踏んづけてを執拗に繰り返す。もうやめてくれ……ッ！

そして、とどめとばかりに気絶した鶴城の胸倉を掴んで持ち上げると、背に乗せて腰を低くし、再び気合を溜め

「死に腐れ汚物下等生物がッ！」

ドゴオンッ！

七海は見事な一本背負いを炸裂させ、吹き飛ばされた鶴城は木に激突。そのまま地面に落つこちらとピクリとも動かなくなった。気絶したのか、それとも本当に死んだのか。何となく後者なのではないかと不安になる。

「あーあ、靴が腐ったらマジどうしよう」

気が済んだのか、七海は殺気を引つ込めるといつものような口調で散々男の聖域を破壊した靴を見て本気で嫌がる。何というか、スITCHの切り替えが早すぎる……

七海は道端に落ちているゴミを見るような目で鶴城を一瞥すると、俺の方に向いて駆け寄って来た。

「ほら、立てる？ 手貸そうか？ 左手くらいなら貸してあげてもいいわよ」

「お、おう」

正直、一人で立つのも苦しかったのでそれは助かる。俺は差し伸べられた七海の手をしっかりと握り締めた。今日の偽デートで演技で腕は組んだりしたが、手を握るのは初めてだ。とても温かくて、冷え切った体には心地いい。

「ほんと、マジ兄貴って弱過ぎ。かつこ良く登場しておいてこれって、チョーダサ」

「う、うるせえ。俺はお前のように空手なんかした事がねえ普通の学生なんだよ。ケンカとか慣れてねえんだから仕方ねえだろ」

「うつわ、言い訳してるし。マジキモ」

「……」

「冗談よ。まあ、兄貴が弱過ぎるから頼りにならなくて空手を始めたんだし。当然と言えば当然よね」

さりげなく暴露された七海の空手を始めたきっかけ。何というか、本当に俺って情けねえ……

俺は痛む体を庇いながら、昏倒している鶴城を見る。

「いいのかよ？ あいつをぶっ飛ばしたら色々とヤバイんだろ？」

「もういいわよ。どうせあいつもうすぐ卒業だし。それにあたしの完璧な演技はこいつ一人がギャーギャー騒いだくらいじゃ傷なんてつかないわよ」

自信満々に言う七海だが、明らかにそれは彼女の強がりだろう。だがまあ、苦勞はするだろうけどこいつならきつと自力で何とかするだろうという確信もあった。こいつにはそれだけの力があるのだ

から。

「っていつかあんた、マジ大丈夫なの？　こんな所でぶっ倒れられたらマジ迷惑なんですけど」

「体中激痛が迸ってるけど何とか大丈夫だ」

「そう。じゃあ一人でも大丈夫ね」

「はあ？」

何を言っているんだこいつ。そんな顔をしていると、七海は鬱陶しげに俺を見詰めて来る。

「あんたと一緒に歩いてる所をもしも知り合いに見られたらマジあたしの汚点になるから、あたしは一人で帰る。それだけの事よ」

「お、お前。一人で帰った結果こうなったのに懲りてねえのかよ」

「さっきは油断してただけだから大丈夫よ。今度は近づいてきたら先手必勝、一撃で仕留めるから」

なぜだろう、こいつならもう本当に大丈夫そうな気がして来たぞ。

「補導警戒中の警官にだけは襲い掛かるなよ？　国家権力相手じゃどう足掻こうと勝てねえからな」

「誰彼構わずぶっ飛ばしたりしないわよッ！　失礼ね！」

「冗談だ。でもよ、やっぱり一緒に帰った方がいいんじゃないか？

男がいた方が安全だろ？」

「弱い男なんて意味ないじゃない」

「……抑止力にはなる」

「……マジあんたバカよね」

はあとわざとらしく大きなため息を吐く七海。そのムカつく態度にはさすがの俺もムツと来る。

「何でだよ」

「こんな時間に帰ったら父さんに怒られるでしょ？　あたしが根回ししてやるって言ってるの」

七海の言葉に俺は慌ててケータイで時間を見る。すでに無駄に厳しい親父の決めた門限を過ぎてしまっている。これはかなりヤバイ

……

「あたしは今日元々ショッピングで遅くなる許可をもらってたからいいけど、あんたはそうもいかないでしょ？」

「そ、そうだが」

「家の前に着いたらメールして。その間、父さんと母さんの目をあたしが引いてあげてから。どうせいつものようにネット開いてるから下に現れないでも思ってるから楽勝よ。部屋に入ってしまったらこっちの勝ちみたいなもんだし」

「お前……」

「元々あんたを巻き込んだのはあたしの責任だし。あたしのせいであんたが怒られたら目覚めが悪いしね。ただし、あんたがドジるとあたしまで怒られるんだから、絶対ヘマしないでよね」

「お、おう」

「……じゃあ、先帰るね。家の前でメールよろしく」

そう言い残し、七海はスタスタと歩み去る。今度はちゃんと公園を出るのを見送ってから、俺はとある後始末をしてから同じく公園を出て家を目指した。

相島や平沢ならこんな時間に外をうろついてても親に怒られる事はないだろうが、俺の親父は本当に無駄にうるさい。頭が固過ぎるというか時代遅れなのだ。

だがまあ、その辺の事は七海に任せておけば大丈夫だろう。俺と違ってあいつはドジったりしねえだろうし。皮肉ではなく、昔からあいつの念の入れようは人一倍であったからの確信だ。

安心しながら歩いていると、改めて今日の事を思い出す。

ただ普通にマンガの最新刊を買いに出ただけなのに、その途中で七海に呼び出しを受けて噴水公園に来てみれば突然俺を彼氏役に仕立て上げて偽装デートをするハメになり、妙に恥ずかしい事をしつつデートを終えると、今度は拉致された七海を助けに向かい、返り討ちにされ、七海の妹外れした戦闘能力の高さを再認識し、そんな妹にほんのちよっとだけ優しくされた。

今まで冷え切っていたとまではいかなくても仲がいいとは決して

言えない俺と七海の関係。互いが互いに干渉する事を避け、必要最低限な交流だけで今日まで過ごしてきた。

それが、今日と言った一日で一体何か月分の、下手したら何年分の会話をした。こちらは本当に何年ぶりかの七海的笑顔を見た。七海と二人で外食なんて、おそらくこれが初めてだろう。ゲームセンターもだ。

たった一日。

たった一日七海と関わる機会を得た。言葉にすればこんなもんだが、その中にはとてつもなく膨大な経験がある。七海の知らない事をたくさん知ったし、継続している事も知る事もできた。

まさか今後良くも悪くもなる事はないと思っていた妹と、こんなに深くまで関わる事になるとは誰が予想していただろうか。まさしく青天の霹靂へきれきという奴だ。

だが、だからと言ってこれからあいつと仲良くしようなんて俺は考えない。向こうもそんな気持ちは毛頭ないだろう。俺の中の七海の評価は相変わらず『生意気な小悪魔』に変わりはないのだから。

長い人生、こんな事もあるかもしれない。今日の事は、きっと良くも悪くも一生忘れない思い出になるだろう。

そう結論を出した頃、チラチラと雪が降って来た。そういえば、今日は夜にも雪が降るなんて天気予報が言っていた事を思い出す。関東中部は雪とは無縁だから信じていなかったが、まさか本当に降るとは。

俺は足早に家まで向かうと、ケータイで七海に連絡。その後七海はリビングに缶詰となり父や母の注意を惹いて見事にミッシヨンコンプリート。その後俺は平然と夕食に顔出したが、七海の言うとおりバレてはいなかった。

四人で食卓を囲みながら、俺は七海の方を見る。家でも『いい娘』を演じているだけあって、外面ほどではないがやはり作り笑顔が咲き誇っている。

すると、俺の視線に気づいたのか七海はこちらを向くと、

「……」

口パクで「バアカ」と伝えと、その口元に小さな笑みを浮かべた。俺は特に何をするでもなく視線を飯に戻して食事を続ける。何となく、いつもの母の味付けとは違う気がした……おいしかった。

それが七海が作った夕食だと知ったのは、少し後の事であった……

…

## 気持と感謝の妹

それからしばらく経ち2月14日。世間がバレンタインデーに浮かれているまさにその日、俺はいつものように学校にいた。

今日は朝からずっとクラスの調子が変わだ。女子はキャツキヤ妙にハイテンションだし、男子は男子でいつになくそわそわしているし皆いつもより服装が整っている。

おい坂下。<sup>さかした</sup>慣れないワックスなんて使ってるから頭が爆発してるぞ。宮代もいつもメガネのくせに何で今日はコンタクトなんだ。岡本はその妙な香水を何とかしろ。

すでに一体何人にツツコミを入れた事か。別に休日でもない普通の平日だ。短縮授業でも学校行事が行われる訳でもない。俺にとつてバレンタインなんてそんなもんだ。特に気にするものでもない。

「何か今日はみんなヤケに張り切ってる感じだな」

そう言ったのはいつもと全く変わらない相島。このクラスでいつもと全く変わっていないのは俺と相島くらいなものだろう。

「くだらねえ。チョコレート業界の陰謀になぜそこまではしゃげるんだ？」

「それは極論だよ。それにみんなが張り切るのも少しわかるよ、だってやっぱりもらえたら嬉しいだろ？」

「まあ、そりゃそうだけだよ」

「そつえば瀬川は何個もらった？」

「……ケンカ売ってんのか？」

「ご、ごめん。まだなんだね」

「……今日はテメエの顔を見てるとイライラする。さつさとその両手に持つてる紙袋を隠せ。さもないと俺だけでなくクラス中の男子になぶり殺しにされるぞ」

俺の友人としてのせめてもの忠告に、相島は「怖い事さらつと言うなよな」と苦笑しながら後ろのロッカーに紙袋を置きにいく。あ



の中には想像しなくてもチヨコが満載されている事は簡単に予想できる。

……と思ったら、廊下から女子が相島を呼んだ。確かあれは隣のクラスのサッカー部の1年マネージャーだっけ？　おお、顔を真っ赤にしてチヨコを相島に渡しやがった。そして相島はにこやかな笑みを浮かべてやがる。

「おおつが かんざき むらやま大塚、神崎、村山。気持ちわかるがバットは引っ込める。それは下手したら下手するぞ」

バットを構えた野球部3バカを制しつつ、俺も若干イラッとしている。

俺は結論を出した。バレンタインはウキウキなんてもんじゃねえ、イライラするイベントだぜ。

結局、相島は紙袋三つ分のチヨコを収穫し意気揚々と家に帰りやがった。逆にあんだけかつこつけていた平沢は収穫ゼロという致命傷を受けて姿を消した。あのまま首吊りでもするんじゃないかって勢いだっだが、大丈夫だろうか。

ちなみに俺のチヨコの収穫は二個だ。だいたいのクラスに一人はいる男子全員にとりあえず配る女子、家庭科部の原田はだから一つと、以前放課後に図書室の本整理を手伝った図書委員の泉いすみから一つだ。

泉はクラスでも目立たない子で、同じ中学出身の女子が俺にチヨコをあげた泉を見て目を丸くして驚いていた。話によると、泉がチヨコを渡すなんて前代未聞だったらしい。何だか泉には変に気を遣わせてしまったようで逆に悪い事をしたな。それにチヨコを貰う時ヤケにあいつ顔が赤かったが、風邪でも引いてたんだろうか。なら尚更悪い事したな。

そんな事を考えながら俺は家に戻った。親父も母さんも仕事で留守だし、七海もまだ帰っていないようだ。

俺は自分の部屋に戻ると、カバンを置いて制服から私服に着替える。

ラフな格好になった俺はベッドに腰掛けた。布団の上に置いてあったマンガが跳ねる。それはあの日買いに行けなかったマンガだ。後日買いに行き、すでに全部読み終えている。

あれから七海との関係が変わった。なんて事は一切ない。というか、あれから七海は部活で忙しくなっただけで帰りが遅くなった事もあって食事時すらも顔を合わす機会がなかった。以前母から聞いたが、七海はバレーボール部に属しているらしく、優秀なアタッカーとして活躍しているらしい。

……まあ、鶴城をブチ飛ばした腕力を見る限り殺人レベルの剛速球を打ち出してそうだが。

ちなみにあれから鶴城は七海の事を学校などでは他言はしていないらしい。ただ、妙に余所余所しくなったそうだ。それだけ七海に聞き、俺達は笑った。

あの時、七海が帰った後俺はケータイで鶴城の恥ずかしい姿を何枚か撮影した。それはもうトランクスードンにしていつもポケットに入れているボールペンで落書きした恥ずかしい所ではない極めて社会的にヤバイ写真だ。男の裸なんて見ても何にも面白くはなかったが、この写真を現像した後日鶴城を呼び出しこれをネタに脅迫しておいた。内容は、今後一切七海に関わらない事、七海の秘密などを暴露しない事。破ったら、この写真がネットを使って世界中に羽ばたくぞというもの。鶴城は顔を真っ青にしてこれに了承。こういう裏方の活躍もあって、七海の学校生活は守られたのであった。

……まあ、七海はこれに対して一切礼は言っていないけどな。本当に礼儀知らずというかムカつくというか、七海らしいというか……何はともあれ、とりあえず兄としての責任はしっかりと果たした訳だ。

あの日の事はもう過去の事。俺達はこれからも以前のような兄弟関係を続けていくのだ。

「ただいまあ」

しばらくし、原田の作ったチョコを食べながらネットを開いてい

ると七海が帰って来た。確か今日は部活は休みとか前に夕食で母さんに言っていた。まあ、だからと言って俺には関係ない事だが。

いつものように無視してネットを続けていると、「兄貴い。ちょっと来て」と珍しく呼ばれた。俺は現在プレイしているゲームの参考にとアップされていたプレイ動画を一度止め、何事かと下に下りる。

どうやらリビングの方にいるらしい。俺はリビングのドアを開けて中に入った。七海は予想通りリビングにいた。それも、仁王立ちしてお待ちだ。その妙な圧迫感に、俺はつい半歩下がってしまった。

「な、何だよ一体」

無言で見詰めて来る七海を不審に思っていると、七海はソファに置いてあったきれいにラッピングされた手の平より少し大きめの箱をズイツと無言のまま突き出して来た。

「お、おう。何だこれは？」

「はあ？ 説明しないといけない訳？」

七海は「あんたマジでバカじゃないの？」と罵倒を言いたげな瞳で俺を睨む。一瞬ムツとするが、ここで言い返せばこじれる事など長年の経験で十分理解している。ここは冷静になるべきなのだ。

冷静になると、答えは案外簡単に導き出せた。今日が何の日か、そしてラッピングされた箱。これらの条件があればそれを予想するなど容易な事だ。

「もしかして、チョコか？」

「そうよ。今日は男子票の書き入れ時のバレンタイン。とりあえず適当にたくさん作って配つたのよ」

何て奴だ。男の純情を弄ぶ卑劣な奴。もてあそこいつはもう悪魔以外の何者でもない。我が妹ながら、何とも末恐ろしい奴だ。

となると、昨日夜遅くまで台所に缶詰状態になっていたのはチョコを作っていたという事か。まあ、せめてもの救いは配るのが手作りチョコだって事だろう。これで市販品だったら小悪魔どころか魔

王クラスだ。

「それで今日適当に配ったんだけどさ、ちょっと作り過ぎて余ったのよね。それで、あんたにもってね」

「お、俺に？」

正直、俺はかなり混乱していた。何せ七海いもつとからのバレンタインチョコなんて一体何年ぶりの事か。最後にもらったのはこいつが小学校2年生の頃だったかそんなもんだ。

俺の反応が気に入らないのか、七海は眉を吊り上げる。

「勘違いしないでよね。これは余りものなんだから。それに、これは一応この前のお礼って形でもあるんだからね」

「散々ボコボコに殴られた報酬がチョコーつかよ」

「はあ？ あんなのあんたが弱過ぎるのが悪いんじゃない」  
ぐう……、言い返せねえ。

反論の言葉を失った俺を七海は満足そうに見ると、再びズイツと今度は俺の胸にチョコを突き出す。

「さっさと受け取りなさいよ。いらないうてなら別にいいけど」

「い、いや。もらうよ。ありがとう」

「フン」

七海は心なしに赤らんだ頬を隠すようにツンとそっぽを向けると、  
「じゃ、じゃあ部屋に戻るから」と言っただけで足早にリビングを出て行った。

リビングに一人残された俺もまた部屋に戻る。机に向かうが、動画はまだ再生させない。俺は七海から貰ったチョコを机の上に置くと、丁寧にラッピングを外していく。何となく、ビリビリと破くのには抵抗があった。

ラッピングを取り、中から簡素な箱が出て来た。すると、そこにはマジックで《バカ兄貴用》とデカデカと書かれていた。

「余りモノ、ねえ……」

俺は珍しい妹のドジに笑いながら、箱を開けた。

中には小さめのチョコプレートケーキが入っていた。しっとりとし

たチョコレートが全体になめらかに掛かった、チョコの香りがしつこくない何とも上品な感じのチョコレートケーキ。あいつが料理も上手だという事は昔から知っているが、ここまで成長していたとは……

そして何より、そのチョコレートケーキにはホワイトチョコソースである言葉が入っていた。

きつと、真正面から言うのは恥ずかしかったのだろうその言葉は、たったそれだけでこの前の事がチャラになってしまいう程のもの。

《ありがとう》。

たった五文字だけど、俺にとっては何よりも嬉しい報酬だった。箱の隅に着いていたプラスチック製のフォークを持ち、少しもつたいないと重いながらもチョコレートケーキの一角を小さく一口サイズに切り分ける。

フォークを突き刺し、口に運ぶ。口に入れた瞬間チョコの味がフワっと口全体に広がった。でも決して甘過ぎず、少しビターも入っているのか上品な味のチョコだ。そして何より、

「うまいな……」

それは、今まで食べたの中でチョコで一番うまいと断言できる最高の贈物チョコレートであった。

何か大きく変わった訳ではない。今までもこれから俺達の関係は基本的には変わる事はないだろう。

でも、ほんの少しだけ七海いもづととの距離が縮まったような気がした。そして、俺は不覚にこう思ってしまった。

妹つてのも、悪くねえな。

## 気持と感謝の妹（後書き）

という訳で、今回の作品は全体的に今までの僕の作風とは少し変わったものになっています。

基本的に僕は三人称、つまりキャラの名前を使って様々な視点から物語を見る方法を使います。しかし今回は一人称、慧人視点だけに固定してみました。これが意外と苦勞する。

その他、僕の作品はシリーズの短編を除けば基本はハーレム形式です。しかし今回は実妹なので恋愛には発展しませんし、七海以外にはヒロインのヒの字も出ていない異色の作品。

今後の書き方を試すため、色々と実験してみましたが何とか完成しました。

基本的に僕は妹Ⅱかわいくて兄に懐くものというイメージで作中にも登場させますが、今回は逆にアンチタイプの妹キャラを描いてみようと思いい立ち、こうなった訳です。

今までとは色々異なる為手探り状態で書いてみましたが、どうだったでしょうか？ お見苦しい点が多々あるとは思いますが、楽しんでもらえましたでしょうか？

何となく、続編がありそうな雰囲気ですが、基本的にこの作品は一発作品なので続編は考えていません。すでに本来の作品の方で手一杯なので。

改めて、最後まで読んでくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9193j/>

---

俺と妹と偽装デート大作戦

2010年10月8日12時36分発行